佳作

姉の日

埼玉県
さいたま市立島小学校 六年
萱場 ほのか

私には十六才、年のはなれた姉がいます。姉はいつも明るくて、やさしくて大好きです。マンガやイラストのかき方を教えてくれたりピアノを教えてくれたり、私がなやんでいる時は、話をきいてアドバイスをしてくれたりします。姉がそばにいるだけで、私はとてもうれしい気持ちになります。

姉は焼肉屋さんで働いていて、東京で一人暮らしをしています。私は一人で暮らすのはさびしいのではないかと思いましたが、姉は一日のほとんど、仕事場のみんなといっしょなので、きっとさびしくなんかない、楽しい毎日なんだろうと思います。

姉は、月に二、三回家に帰って来ますが、その時、よくお肉を持って来ます。私の知らないような名前の肉がたくさんありますが、もとをたどれば「ぶた」と「牛」。「その肉はぶたの胃だよ。」などと、細かく教えてくれるので、自分の食べているものがそうだと知ると、おかしく感じました。

私は、そんな姉のために、「姉の日」を作ろうと思いました。「姉の日」は、母の日や父の日のように、その人にありがとうを伝える日です。私は姉を喜ばせたくて「姉の日」をいつにしようかと考えました。はじめは、五月は母の日、六月は父の日、七月は姉の日と思ったのですが、休みの都合もあって、八月二日を「姉の日」と決めました。そしてこの日に姉に感謝の気持ちを伝えることにしました。

七月の初めごろ、私は姉に「姉の日」のことを話しました。するととても喜んでくれました。プレゼントとしてほしいものを聞くと、「ぶたと牛のぬいぐるみがいいな。」と言いました。私は裁ほうが好きなので、持っていた材料ですぐに「牛」をつくり上げました。なんだかとてもワクワクしてきました。七月の後半になって、さらに材料を買い足して、「ぶた」もつくり上げました。ぶたには少し細工をしました。ぶたの後ろ側に「売り上げUP↑」と赤い糸でぬいつけました。お守りです。

「姉の日」当日、部屋にかざりつけをして姉が帰ってくるのを待ちました。そして、牛とぶたのぬいぐるみの入った箱にラッピングもして姉にわたしました。その時、姉の顔がパァーッとかがやいたように見えました。

「うわぁ！かわいいな。レジにかざろう。みんなに自まんしよう。」

喜んだ姉の笑顔が私は大好きです。姉の笑顔を見るたびに私まで笑顔になるようです。

私は「姉の日」だけでなく、いつも姉に感謝しようと思いました。姉がいること、姉のすべてに「ありがとう」。